

神楽研究コラム

「紅葉狩」



【目次】紅葉狩



はじめに	3p
第一章 紅葉狩とは？	4p
第二章 平維茂	6p
第三章 戸隠山 鬼女伝説	8p
第四章 平安の悲劇	10p
補足	12p
参考文献	13p
写真協力	
イラスト	
著者	

はじめに 神楽研究コラム 「紅葉狩」

神楽研究コラムは、第4回マイクロソフトNPO支援プログラムにより、2006年8月に開設した、神楽ポータルサイト「神楽の杜」の情報発信ツールとして併設した「神楽のぶろぐ」の特集記事として掲載したものです。

第1回目として、神楽の演目のなかで人気のある「紅葉狩」を取り上げ、若い特派員の視点から解説したものです。

文書も現代風ブログ調になっており、若年層の方には読みやすくなっているのではないのでしょうか。

神楽通の方にも一度、ご笑読頂ければ幸いです。

2007年1月23日

NPO広島神楽研究所 事務局

第一章 紅葉狩とは？



今回のテーマは「紅葉狩」。みなさんは「紅葉狩」と聞いて、何を思い浮かべられるだろうか。美しい姫の舞、鬼たちの豪華な衣装、紅葉に染まった実際の山々を想像される方もおられるかもしれない。はたまた、化粧したイケメンの神がパッと浮かんでくる方も…、いや、それはないか。ともかく、それらは皆「華やか」なイメージではないだろうか。実にシンプルなようだが、これこそが「紅葉狩」の一番の魅力であると思う。

シンプルと言えば、ストーリーも実にシンプル。では**基本的なあらすじ**を紹介しよう。「そんなの知ってるから飛ばして次読もう」って？いやいや、そう言わずに。

平維茂が信州戸隠山で、紅葉狩の宴を催す美女たちに出会う。すすめられるままに酒を飲んで酔いふした維茂に、正体を現した鬼女が襲い掛かる。しかし日頃信心する八幡大菩薩に救われた維茂は、授かった神剣を持って鬼女を征伐する。



「はいはい、それで？」…お気づきの方もいらっしゃるだろうが、「紅葉狩」のあらすじには**2パターン**ある。平維茂が、鬼女征伐の勅命を受けて戸隠山に向かうものと、狩野の旅に出て道に迷って戸隠山へと入っていくものの2つである。これは大きな違いだ。「そんなんでもいいよ！」…まあまあ、そう言わずに。



要するに、勅命を受けて向かうパターンでは、鬼女たちがいると知っているにも関わらず、奥山で出会った美女たちにだまされてしまうのだ。それほど紅葉が人を惑わす、という意味にも取れるが、それにしても維茂さん、情けないぞ。八幡大菩薩が助けに来てくれたからいいようなものの、どうやら朝廷は人選を誤ったようだ。もしこれが**源頼光**だったらどうであろう。「物の怪バカ」の頼光さんの事だ、美女たちを見た瞬間に、目の色変えて切りかかったに違いない。

それと、このあらすじの微妙な違いは、いろいろな所に影響しており、神楽団ごとの違いをじっくり見比べると面白いと思う。例えばセリフ。「紅葉狩」のセリフと言えば、「良き酒肴が登り来る登り来る～！」ではなかろうか。これは維茂が勅命を受けたパターンでは使われないのが普通である。鬼女たちも、維茂の存在を知っているパターンとそうでないものがあるから、少しややこしいが、知っていれば「維茂主従登り来る～！」というセリフになっているはず。

「ひろしま神楽」の代表的な演目である「紅葉狩」。あまりにもポピュラーになりすぎて、なんとなく見てしまうかもしれないが、よおく見るとなかなか興味深い演目でもあるのだ。次回、「紅葉狩」を見るときにぜひ参考にしていきたい。



第二章 平維茂



では次は「紅葉狩」のヒーロー、平維茂についてみてみよう。神楽の中では従者を引き連れて狩野の旅に出るなど、どちらかという優雅な暮らしをおくっているようなイメージがある。しかし実際は、あの源頼光らと肩を並べられるほどの武勇者として知られていた。ただ、その他のことについては謎が多く、いろいろな書物に登場するも、その内容が一致しないのだ。

桓武平氏の血筋であるのは確かだが、武蔵権守繁盛(むさしのかみしげもり)の子であるという説と、その繁盛の子である兼忠(かねただ)を父とするという説とがある。まあどちらにしても、「滝夜叉姫」に登場する平貞盛(さだもり)と親戚にあたる。また生没年についてもハッキリとせず、約80歳まで生きたとされるが、これは当時としては異例である。また、神楽のセリフでも登場する「余五将軍(よごのしょうぐん)」だが、これは維茂の別称である。が、これについてもなぜそう呼ばれたのか様々な説があり、ハッキリしない。



本当に謎だらけだが、神楽に関してはもう一つ謎がある。それは維茂が連れている従者だ。



これは神楽団によってかなりバラバラである。藤原三成、長谷兼忠(はせのかねただ)、相良蔵人、日南友親(ひなのともちか)、清原成時、小松高正、ざっと調べただけでもこんなにいた。ただ単に従者、随臣(ずいしん)などとしているところもあれば、なんとビックリ、坂田金時が出てくる団もあった。こうなればなぜこんなにもバラバラなのか、調べてみないわけにはいかない。

そもそも、もともとは誰なんだ？ってことで、佐々木順三先生が書かれた台本を開いてみる。これがまた予想外の展開。なんと維茂さん、従者を連れずに一人で戸隠山に向かっているのだ…。ちなみに、勅命を受けてではなく、道に迷って山に入っている。もとは一人だったが、やはり見た目を考えれば二人のほうがよい。が、正式な人物がいないため、このように神楽団ごとでバラつきが出てしまったのだろう。この辺は神楽団の方からコメントいただけるとありがたい(笑)。



というわけで、謎ばかりでいまいちスッキリしないが、紅葉狩のヒーロー「平維茂」についての章を終わりとする。次回は、紅葉狩伝説についてみていきたい。

第三章 戸隠山 鬼女伝説

では、戸隠山の鬼女伝説についてみてみよう。神楽の「紅葉狩」は謡曲「紅葉狩」が出典となっているが、「紅葉狩」伝説についてはいろいろなパターンが伝承されている。その中でも一般的なものを紹介したい。



今から千年以上昔のこと。奥州・会津に笹丸(ささまる)と菊世(きくよ)という夫婦がいた。しかしなかなか子供が生まれず、ついには**第六天魔王**(だいろくてんまおう)に祈願をする。そして937年、二人の間に娘が生まれ、「**呉葉(くれは)**」と名付けられた。呉葉はとても美しい外見を持ち、琴の名手でもあったという。しかし、第六天魔王の申し子である呉葉は、邪悪な心と妖術を持っていた。

この第六天魔王というのは、仏教において最大の悪とされる鬼である。旧舞の「八幡」に出てくる鬼がこの第六天魔王だが、なぜ夫婦がこのような魔王に祈願したかは不明だが、まずその出生こそが**悲劇の始まり**だったのだ。



成長した呉葉は、近くの豪族の息子に嫁ぐことになった。しかし彼女は「**一人両身**」という妖術を使って分身を作り出した。その分身を嫁がせ、自分は両親とともに婚礼支度金を持って都に逃げたという。いわば**結婚詐欺**か。

都に上った呉葉は「紅葉(くれは)」と改名し、四条通に化粧品や髪飾りを扱う店を開いた。やがてその美貌が源経基(みなもとのつねもと)の目に留まり、寵愛を受けるようになる。同じ頃、経基の正妻が奇妙な熱病にかかり、祈祷が行われた。すると紅葉が妖術を使って正妻を呪い殺そうとしていたことが判明する。普通ならば処刑されるところだが、紅葉は経基の子を宿していたため罪一等減ぜられ、信濃国戸隠山に追放という処分が下った。そして956年9月、紅葉は両親とともに戸隠にある荒倉山の岩屋に護送されたのである。



いったんは心を入れ替え、付近の住民の面倒を見たりしていた紅葉だったが、都に帰りたという気持ちが募り、次第に鬼の本性が現れるようになる。山に住む無法者を集め、旅人を襲って金品を奪うなど悪行を重ね、ついには遠方の里にまで出沒するようになった。それが都まで伝わり、969年、第63代冷泉帝は平維茂に戸隠山の鬼女征伐を命じた。



ここまでを前半とし、残りはまた次回。お気づきのファンもいらっしゃるだろうが、宮乃木神楽団と中川戸神楽団が、この伝説に忠実な「紅葉狩」を舞われている。上記した内容は最初の場面のセリフに登場するので、ご覧の際はよおく聞いてみる事をオススメする。後半は、紅葉VS維茂の物語、そして紅葉狩伝説の舞台裏に迫ってみた

い。

第四章 平安の悲劇



鬼女征伐の勅命を受けた平維茂は、兵を率いて戸隠山へと向かった。まず維茂は様子をさぐるために僧の姿に変装して山に入った。これを知った紅葉は、神楽でもおなじみの紅葉狩の酒宴を開いて維茂を誘い込んだ。そして毒酒を飲ませようとするも、維茂がこれを見破り、飲んだふりをしてその場を切り抜け、無事に下山した。

兵を整えた維茂は、ついに紅葉の住む岩屋へと進撃。しかし紅葉の妖術には歯が立たず、幾度攻めても負けを重ねるのみだった。そこで維茂はいったん兵を下げ、戸隠山から南へ約40キロ離れた北向観音(きたむきかんのん)へ参拝し、「降魔(ごうま)の剣」を授かる。軍を立て直した維茂は再び紅葉との戦いに挑む。ついに正体を現した紅葉は、空に舞い上がって妖術を使うが、山の麓にある戸隠奥院の上空から金色の光が飛び出した。その光で両目を貫かれた紅葉は地上に落ち、維茂によってとどめをさされた。こうして戸隠山の鬼女、紅葉は成敗された。



「紅葉狩」伝説については様々な説が残されているので、あくまでもその一つという事でご了承いただきたい。さて舞台となったこの戸隠山、実は意外な由来がある。その昔、天照大御神が岩戸にこもられた時、手力男命がその岩戸を開いて投げ捨てた。その岩戸が信州信濃国に落ちて山となったため、「戸隠山」という名がついたのだ。なかなかのトリビアではないかと思うが、いかがだろうか。

平安の中頃から末期にかけて、鬼や妖怪の伝説が数多く作られている。先に紹介した「大江山」もさかり。山に住み着いた盗賊たちが忌み嫌われて「鬼」に仕立て上げられたのは前に紹介した通りだが、この頃は女の盗賊も少なくなかったようだ。「今昔物語」にも女盗賊の話が載っており、それを考えると、戸隠山に女の頭を持つ盗賊団があったとしても良さそうだ。また、「紅葉狩」伝説とは少し違うが、源頼光の父である満仲が、戸隠山で鬼を切ったという話が「太平記」に収められており、やはり戸隠山になんらかの賊集団があった可能性は高いように思う。



芸北神楽における一般的な「紅葉狩」だと、ただの鬼女大王でしかないが、実はこうい



った伝説の上に作り上げられたものだったのである。クライマックスで、何度も神に斬り付けられ、もがきながら死んでいく鬼の姿に、みなさんは何を思うだろうか。恵まれない環境で生まれ育ち、犯罪に手を染め、挙句の果てに処刑される。ちょっと大げさかもしれないが、私には現代にも共通するような物語に思えてならない。珍しくマジメな終わり方だが、これにてシリーズ「紅葉狩」を終了としたい。次回の予定はないが、リクエスト・ご意見などドシドシお寄せいただきたい。

補足



本文中で書きそびれたことをいくつか補足説明。まずは紅葉が寵愛を受けた**源経基**について。この人物を学校の授業で聞いた覚えのある方はいらっしゃるだろうか。とにかく源という苗字の割りには「で、だれ？」みたいな感じがするが、実は**清和天皇**の孫に当たる人物である。そしてその息子には**源満仲**。ここまで書けばピンと来るだろう。そう、実はあの**頼光**のおじいさんになるのだ。ちなみに、頼光が生まれたとされるのは948年で、紅葉が平維茂に成敗されたのが969年とされているから、その時**頼光は21歳**だったということになる。さらにちなみに、頼光が大江山へ登って**酒吞童子**を退治したのが995年とされており、この時頼光は47歳。若き日の頼光は、**維茂の武勇伝**を聞いて「いつか自分も！」と思っていたのかもしれない。

もう一つ、紅葉が従えていた部下について。神楽で見ると、鬼女大王が中心で**手下が二人**というものだが、伝説において紅葉は**盗賊の首領**だった。その手下には**平将門**に仕えた者の子孫と伝えられる**鬼武**、**熊武**、**鷲王**、**伊賀瀬**という4人の盗賊もいたという。もっとも有力な部下は、「**おまん**」という怪力を持った女だった。その背丈はなんと8尺(2m40cm)もあったと伝えられ、35人力という怪力に加え、一晩に40キロ以上の距離を走りまわったりと、まさに**バケモノ級**の女傑だった。維茂が率いる軍勢によって、紅葉を始め盗賊たちがことごとく討ち取られても、自慢の怪力と快速で**一人逃げ延びた**。そしてある山中で、水溜りで血まみれの手足を洗い、ふと目をあげると、そこには夕日で染まった**美しい戸隠の山々**が広がっていた。あまりの美しさに見入っていたおまんが、再び目を落とすと、その水溜りには血で汚れて凄まじい形相の**自分の顔**が映っていた。そこで我に返ったおまんは、今までの罪を改め、また亡き紅葉たちの御霊を慰めるために**尼**になったという。そして毎日祈り続けた末、善人に戻ったことを悟り、自ら首を落としたという伝説が残っている。



以上、神楽だけでは知ることのできない、「紅葉狩」の伝説**補足編**をお届けした。

参考文献

馬場 あき子 「鬼の研究」 ちくま文庫

竹本 幹夫 「対訳でたのしむ 紅葉狩」 檜書店

高平 鳴海・糸井 賢一・大林 憲司・エーアイ スクウェア 「鬼」 新紀元社

佐々木 順三 「かぐら台本集 新曲目の部」

写真協力

日吉神楽団

上河内神楽団

大塚神楽団

中川戸神楽団

原田神楽団

西宗神楽団

宮乃木神楽団

細谷社中



イラスト

門出尚子

著者

門出佳大(NPO 法人 広島神楽芸術研究所 研究員)

神楽研究コラム
「紅葉狩」
2007年2月1日

NPO法人広島神楽芸術研究所 <http://www.npo-hiroshima.jp>

〒731-1521 広島県山県郡北広島町丁保余原1501-1

(〒731-1515広島県山県郡北広島町壬生149)

TEL(0826)72-5307 Fax(0826)72-4401 mail office@npo-hiroshima.jp

NPO法人広島神楽芸術研究所（広島分室）

〒731-3166 広島市安佐南区大塚東1-1-1広島修道大学大学院社会学日隈研究室

TEL(082)830-1136 FAX(082)848-6633 mail higuma@shudo-u.ac.jp

著者:文責 門出佳大(NPO 法人 広島神楽芸術研究所 研究員)